

3411 貝殻と灯台：状況と心模様①

イベリア半島、ポルトガルから。6月出発、8月下旬帰国、ひとり旅。
日本からフランス、パリ、シャルルドゴール空港経由、
ポルトガル・リスボンへ



今回も長期間。北に行くか、南か、東か、西は大西洋。日本人の多くが行く
北への進路はとらず南下を選択。
漠然と半島の西南の先端にあるサンビセンテ岬方向をめざした。

地の果てへの憧れがある。プロセスを楽しむ。
それが旅らしい旅だと思っている。思い立ったが吉日。何度もチャンスがある訳ではない。
出来る時に出来る事を実践。今、天の時。そして、南下を始めた。

どこか遠くに行きたい。最北端、最南端。日本人が行かない地に、一人身を置く夢とロマン。
「その地に身を置きたかった」という単純な動機である。
男の子とはそうしたもの。

その先に何があるのだろう、という思いだったのかも知れない。
子供の頃、夢と憧れを抱いていた国、ポルトガル。
大人になった今、実現した。子供の頃の気持ちで、旅をしてみたい。

世界地図を見ると、日本からは、はるかに遠く、
情報も少なく、直航便もなく、地の果てに位置する。言葉もポルトガル語、
私は話せない。ガイドを雇っての旅ではない。まして、ひとり旅。

1543年、種子島鉄砲伝来、そして、キリスト教伝来。
歴史の時間が大好きだった。遠くて、親しみを感じるポルトガル。
「ありがとう」は、ポルトガル語の、オブリガード。

思えば、ポルトガル人が、最初、日本をめざしてやって来た。それとも漂着だったのか。
東洋に向けて船出をして来たことに興味を抱く。
どんな気持ちだったのか、日本語を知っていたとは思えない。

今では、本もあり、いろいろなことが判明しているのだろうが、
知りすぎて、旅をしたのでは面白くない。
知識や先入観は、思考力や判断力を時には鈍らせる。

最小限の情報でいい。感性や直感の旅がなんとも楽しい。
異郷の地に来れば、思い込みは危険かもしれない。地球を何周も、たった一人で、
無事な旅ができた背景には、感性や直感の旅が幸いしたのかも知れない。

慎重、臆病、今となれば、臆病は勇気。当時、外務省邦人保護課の所長が、
独特の私の旅のスタイルに、若者でないという思いがあったのか、その無謀さに驚いていた。
しかし、久楽独特の秘策を持ち合わせていた。

危険や人を観るインスピレーション。独特の靈感かも知れない。